

平城京左京三条一坊一坪の発掘調査（平城第 488 次調査）現地説明会資料

2012年3月10日（土）13：30～

独立行政法人 国立文化財機構
奈良文化財研究所 都城発掘調査部

1. 平城京左京三条一坊一坪に対するこれまでの調査

平城京左京三条一坊一坪は、平城宮の正門である朱雀門のすぐ南東に位置する。調査開始前は、国史跡平城京朱雀大路跡に隣接する緑地公園として整備されていた。この場所に国土交通省が平城宮跡展示館を建設する予定で、昨年度から奈良文化財研究所が発掘調査をおこなっており、本調査もその一環である。

調査区の西方にあたる朱雀大路との境界付近については1986～1996年にかけて奈良市教育委員会によって、北方に位置する二条大路との境界付近については1986年に奈良文化財研究所によって調査がおこなわれた結果、この左京三条一坊一坪は少なくとも朱雀大路に面する西面と二条大路に面する北面には築地塀などの遮蔽施設をもたないことが判明している。また1996年の奈良市教育委員会の調査によって、坪を南北に二分する東西方向の坪内道路の存在が明らかとなっている。

奈良文化財研究所が昨年冬におこなった第478次調査では、調査区の北東側に井戸痕形を伴う上段正方形、下段六角形の大型井戸が確認され、井戸の中からは木簡や、木製品、金属製品、土器、瓦などさまざまな遺物が出土した。また昨年秋におこなった第486次調査では、調査区の北方に平城宮造営に伴う鉄鍛冶工房群が広がることを確認している。

2. 検出した遺構

検出した主な遺構は掘立柱建物4棟と坪内道路の南・北側溝である。建物群は遺構の重複関係から、いずれも坪内道路より古く、道路とは併存しない。

①坪内道路造営以前の遺構

建物1 調査区西部で検出した南北棟の掘立柱建物。本調査区では桁行8間、梁行2間分を検出した。東面南半4間分に廂が付く。身舎内部の妻柱と側柱の交点にあたる位置から柱穴が検出され、間仕切構造をもつ長房状の建物であったとみられる。調査区西方の廂の有無は不明であるが、南方へ続く。柱間寸法は桁行、梁行ともに約3m〔10尺〕等間で、廂の出は約2.4m〔8尺〕である。なお廂から約2m東に、廂にそって幅50cmのごく浅い溝を確認した。廂の東北隅に合わせるように北端で西に折れることから雨落溝の可能性はある。

建物2 調査区の南部中央で検出した南北棟の総柱建物。梁行は3間、桁行は本調査区では4間分を検出し、さらに調査区南方へ続く可能性がある。柱間寸法は桁行約3m〔10

尺]等間、梁行約2.4m [8尺]等間である。

建物3 調査区の東部で検出した桁行2間、梁行1間の南北棟の掘立柱建物。柱間は桁行、梁行ともに約3m [10尺]等間である。建物4と重複し、これよりも古い。

建物4 調査区の東部で検出した南北棟の掘立柱建物。梁行は1間、桁行は本調査区では4間分を検出し、さらに調査区南方へ続く可能性がある。柱間寸法は桁行、梁行ともに9尺[約2.7m]等間である。建物3と重複し、これよりも新しい。

②坪内道路

一坪を南北に二分する東西道路。直上に旧耕作土および旧床土があり、本来の路面はすでに削平されている。調査区の北よりで約44mに渡って道路の南・北側溝を検出した。どちらも素掘溝で護岸などを施した形跡は認められない。側溝は南北ともに幅0.8～1.3m、深さ0.2～0.3mを測る。側溝底面の標高は西方が東方より高く、西側から東側へ排水したものとみられる。両側溝の中心間距離は9.5mで、現状での路幅は8.2～9mほどである。側溝は北側の鉄鍛冶工房に由来するとみられる炭混じりの整地層の上から掘り込まれており、坪内道路の造営時期は、少なくとも鉄鍛冶工房の操業開始時期よりは遅れたものとみられる。

なお奈良市教育委員会が1996年におこなった調査によって、この坪内道路の南・北側溝が朱雀大路の東側溝に接続すること、坪内道路の西端が橋によって朱雀大路と連結されていたことが明らかとなっている。

③そのほかの遺構

このほかにも土坑や柱穴などを確認している。特に建物3・4よりも東側で柱穴をままとって確認している。建物1～4とは東西の柱筋が異なり、調査区の東方へと展開していくものとみられる。時期、性格については検討中である。

3. 出土遺物

土器・瓦などが主に出土している。坪内道路の南・北側溝から出土した土器、瓦は、いずれも奈良時代のものである。また南・北側溝からは木炭や鉄滓、輪羽口といった北側に広がる鉄鍛冶工房と関連する遺物は出土していない。なお本調査区内では、遺物包含層を含めて鉄鍛冶関連遺物はほとんど出土していない。

4. まとめ

現時点における本調査の成果は次の通りである。

①坪内道路の規模

朱雀大路に接続する東西方向の坪内道路が、東へ少なくとも60mは延びていたことを確認した。左京三条一坊一坪の東西幅はおおよそ90mであり、坪内道路全体の2/3が明らかとなったことになる。その結果、側溝を流れる排水は朱雀大路東側溝から分岐する西側から東側へ流れていた可能性が高く、平城京内の排水体系の一端をうかがうデータ

が得られた。

また道路の規模は両側溝の心間距離で 9.5mをはかる。これは隣接する朱雀大路の約 75mや二条大路の約 37mには遥かに及ばないものの、この一坪と南隣の二坪をわける坪境小路（三条条間北小路）の約 7mよりも大きく、坪内道路としては最大クラスの規模である（数値はすべて両側溝の心間距離）。

道路の造営時期を知る直接的な手がかりは得られていないが、奈良時代の建物群が道路の下層から検出されたことなどから、条坊の設定された遷都時よりは新しいとみられる。また道路の廃絶時期については、側溝内から出土した遺物からみて奈良時代後半の間におさまる可能性が高い。

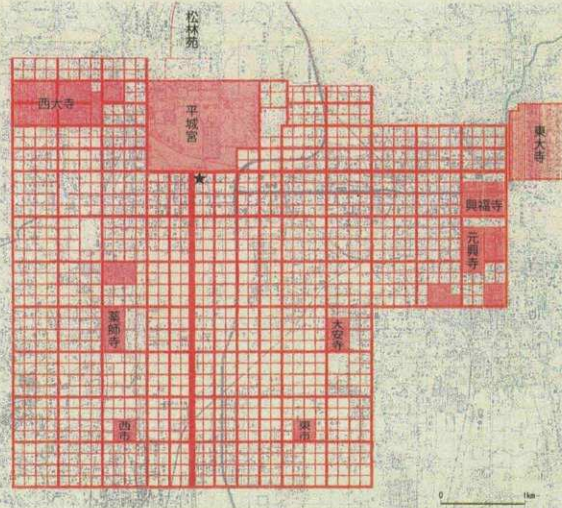
②坪内道路造営以前の建物群の存在

坪内道路が造営される以前には正方位をとる南北棟建物（建物 1～4）が建ち並んでいたことが明らかとなった。各建物の東西の柱筋は揃っており、同一の設計基準によって計画的に配置されている。また、これらの建物群と北側で確認されている鉄鍛冶工房群は、いずれも坪内道路造営以前の遺構であることを確認した。

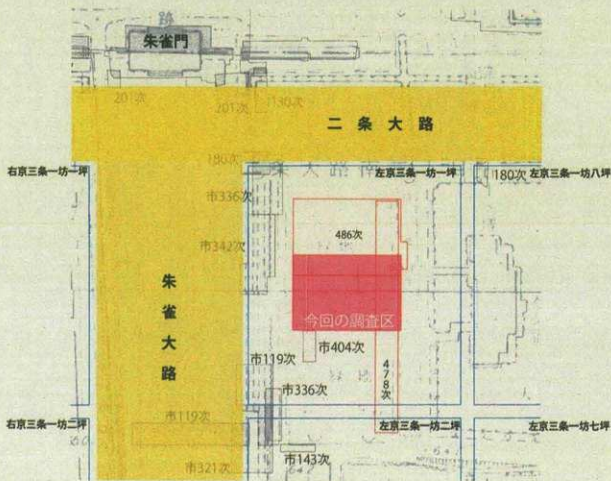
建物 2 のような総柱建物は一般に高床の倉庫と考えられており、80 m²を超える大きなものである。また桁行 8 間〔約 24m〕を超える長房状の掘立柱建物（建物 1）も平城京内では異例の規模である。これらの建物の構造や規模をふまれば、北側に展開する鉄鍛冶工房などの現業部門に対する事務・管理部門とみること可能である。まだ全容は明らかではないが、この坪が遷都前後に平城宮・京造営の拠点であった可能性はますます高まったといえる。建物群は南方へ続くとみられ、来年度に予定されている本調査区南方の調査によって、建物群の広がりが見ることが期待される。

③坪内道路造営後の左京三条一坊一坪

今回の調査区からは、坪内道路より確実に新しい遺構は確認されなかった。この左京三条一坊一坪は、当初から朱雀大路との間に遮蔽施設をもたなかった可能性が高いが、坪内道路の設置にあたって、約 4m の幅をもつ朱雀大路東側溝との間に橋が架橋されることによって、この坪への朱雀大路側からのアクセスの利便性は格段に向上したものとみられる。道路設置後のこの坪の利用方法を直ちに明らかにすることは難しいが、平城京内最大クラスの坪内道路や大型井戸の存在は、朱雀門、朱雀大路と一体的空間を形成していたこの坪の特殊性を端的に示している。

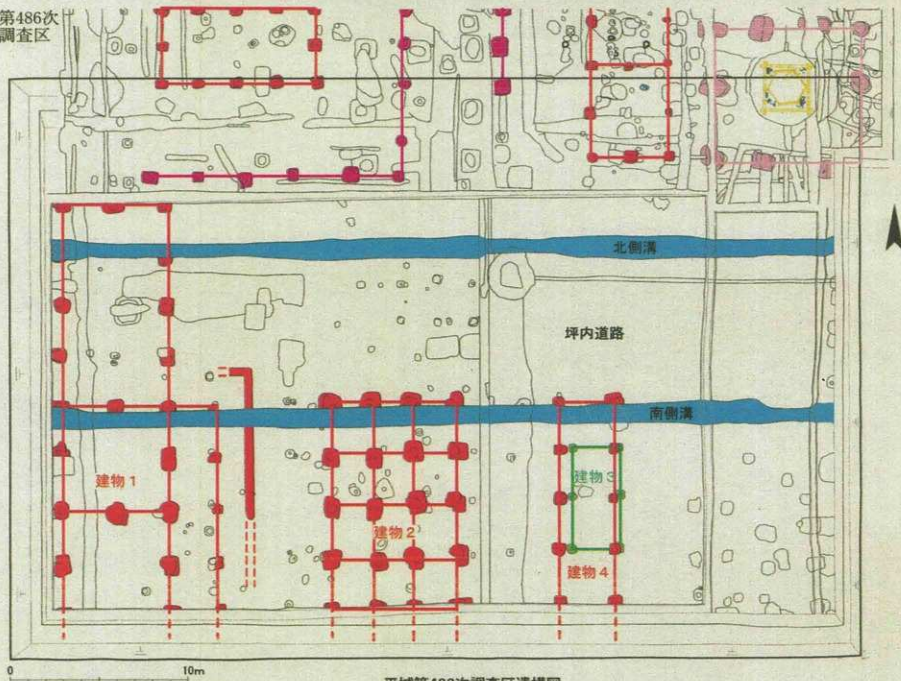


平城京左京三条一坊の位置(★の位置)



調査区的位置

第486次
調査区



平城第486次調査区遺構図